

ささやきボイスシリーズ 8

タイトル：僕の幼なじみはお世話好き

キャラ設定

みうらのぞみ
三浦 希 (18)

大学1年生

◎外見

身長：166センチ

体重：上記身長でやや痩せているに近い標準の体重。

バスト：Dカップ

薄い茶かかったショートカット。

流行には詳しいがミーハーではなく、ファッショセンスは独自のものがある。

大学は主人公と同じ大学で、学部も同じく経済学部。

とりあえず潰しは利くしという事で。

◎家族構成

父、母、希、妹 (15)

父親は自営業で電気工事業。

母親は父親の仕事で経理。

妹は高校入学したばかりの女子高生。

◎性格・人物

明るく活発だが根は優しい。

見た目は可愛い系で、ファッションセンスも良いが意外と家庭的な面も強く父親の仕事を手伝う母親を助けるために家事全般もこなす。

一見、遊んでいるように見えても必ず見えないところで努力はしている。

負けず嫌いな部分もあるが、弁える事も知っており引くべきところは引くこともある。

◎特技・エピソード

母親がテニスをやっていた事もあり、本人もテニスを中学から行っている。

市の大会ではベスト4、県大会では3回戦まで何とか進めるも準々決勝まで行けない。

前述のとおり家事全般がこなせる。この能力を生かして大学で一人暮らしを始めた主人公のアパートへ行って「どうせ一人じゃろくなもの食べてないでしょ？」と手料理を振るったり掃除を主人公に指南したりしている。

◎将来の夢

自身は主人公と一緒にいたいという思いがある。

仕事の事はある企画立案に携われるようになりたいと考えている。

◎主人公（先輩）への思い

主人公は何かと希を助けてくれることが多く（物理的な意味）、特に仕事で忙しい父親とそれを手伝う母親の中、小学校の頃など良く一緒にいてくれた事が心に残り未だに慕っている。

中学からは女子同士の友達や部活での付き合いが多かったのもあるが、希の人間関係を尊重するように距離を取っていた。

高校進学は希が先に希望校を主人公に伝えていて、主人公も特に行く場所決まっていなくて同じ高校へ進学。大学はむしろ希が主人公についていった。

なかなか告白する事は出来ないでいるが、好きでいる事だけは大切にしている。

—プロット—

<チャプター1:世話好きな幼なじみ>

大学の講義がない日曜日の昼近くにアパートに訪ねてくる幼なじみに半ば起こされる形で起きる。

希はいつものように主人公を起こす。

溜めて洗ってない洗濯物に、主人公にも手伝わせて布団を畳ませて、掃除をする。

<チャプター2:休憩しながらまったり>

一通りの事を済ませて、朝ごはん代わりに昼を食べ終わると眠くなってくる主人公に希が耳かきを提案してくる。

そして耳かき、耳への息の吹きかけをした後に告白してきて二人は恋人に。

—台本—

<チャプター1>

【インターホン】

「ねえ、まだ起きてないのー？」

【インターホン】

「おーい、可愛い幼なじみが遊びに来てあげてるんだよー」

【ドア開く】

「やっと起きて来たねー」

「えっ？起きてたの？その頭で？」

「寝癖を直してなかったって……。ぜーったいに嘘だから！

だって今、起きてきましたって顔してるもん」

【部屋に上がる】

「バレたか、じゃないよお。もうお昼になるんだよ？いい加減にちゃんと起きるようにしないと」

「え？自由な時間が欲しくて一人暮らし始めたのに、これじゃ意味がない？」

「いや、でもね？私だって一人暮らししてるけど自分の事はやってから来てるんだから」

「一人暮らしだからって怠けじゃダメ！ちゃんとした生活しないと」

「まるで母親みたいって……。せめてお姉ちゃんくらいにしておいてくれないかな？」

「どっちも大して変わらないって、全然変わるんだからあ！」

「まあ、それは置いておくとして」

「え？ずいぶんとあっさりしてるって？何年、君と幼なじみしてると思ってるの？」

「こんなの挨拶みたいなものじゃない」

「で、まだ起きたばかりで洗濯もしてないんでしょ？希が洗濯物してあげるから、あなたは布団でも畳んで置いて？そのあと、希が掃除機かけてあげるから」

「自分でやるからいい？あのね、もう、お昼なんだよ？」

「それなのに起きたばかりで、

これから洗濯やら、なんやらやったらあっという間に夕方になっちゃう」

「それに希が手伝わなかったら結局、夕方あたりに洗濯ものはじめて室内干しとかしてそうだもん。知ってる？ちょっと、あなたの服匂うんだよ？埃っぽい感じのね」

「はいはい、そんなに落ち込まない！だから希が選択してあげるって言ってるでしょ？」

「じゃあ、洗濯物してきちゃうから～」

【↓遠くから聞こえる感じで】

「えー！これ、ほとんど一週間分の洗濯じゃないの！」

「まさか、希が先週来てから洗濯物をしてないってこと？」

「洗剤も柔軟剤もほとんど無くなってないし」

「もう一、ほんとににだらしないんだからー」

【↓距離戻す】

「あ、布団たたみ終わったみたいね」

「ちょっと、あなたね。洗濯物、一週間分溜めてたでしょ？」

「え？平日は疲れてやる気がしない？」

「あのねー、疲れるのは分かるけどもう少し計画的にすれば洗濯だって出来るはずよ？」

【↓希みたいな～は誇らしげに】

「希は慣れてるから出来る？まあ、それは昔からやってるからね。でも、それを差し引いても家事力は男だって必要よ！というか最近、希みたいな女子の方が貴重なんだから」

「え？だったら希と結婚したい？希なら気心も知れてるし、昔から家族みたいなものだから？」

【↓少し照れながら】

「ちょ、ちょっと！何言ってるのよ！」

「の、希にだって選ぶ権利はあるんだからね！」

【↓口調戻す】

「え？俺じゃやっぱり不満だよな？って」

【↓今度は少し慌てながらフォローする】

「べ、別に、あなたじゃ不満ってわけじゃないんだから！た、ただそんな家事ができるからとかそんな理由が嫌なだけ！」

「それじゃ、好きならいいのかって？」

【↓少し照れながら】

「も、もちろん単に好きってだけじゃ弱いけど、でも最低限希のことが好きって思ってるほしいのは確かだよ」

「え？じゃあ、真剣に考えてみる？」

【↓照れが隠せない雰囲気です】

「そ、それならいいわよ！ちゃ、ちゃんと希の事を真剣に考えてね！」

「じゃ、じゃあ掃除機かけちゃうから」

【チャプター2】

「うん、だいぶ綺麗になったね！」

「え？疲れたの？そうね、あなたじゃ疲れるかもねー」

「希はそんなに疲れてないのかって？そうね、だって希は慣れてるからこれくらいじゃ」

「あ、じゃあ、休憩がてら耳かきしてあげるよ！」

「え？耳かきなんてあったかって？ふふん！こういうこともあるーかと、用意してたの」

「ほらほら、希の膝に頭を乗せて？」

【音声方向：右側から。以降指示あるまで方向は右】

【距離は近くに聞こえるように】

【↓髪の毛くすぐったそうに笑う】

「ふふふ、ちょっとあなたの髪の毛が触ってくすぐったくて」

「え？柔らかくて暖かい？」

「希は女の子だからね？柔らかいんだよー」

「それにいい匂いがする？ちょ、ちょっと変な事言わないでよ！」

「変な意味じゃないの？安心するような香り？そうなんだ…。それならいいかな」

「じゃあ、まずは右耳からやって上げるね？」

【耳かき音—耳かき音はこちらで用意するので収録等は不要です】

「ふふふ、リラックスしてるって感じになってるね」

「ん、気持ちがいい？それは良かった」

「それじゃあ、反対側ね」

【音声方向：左側から。以降指示あるまで方向は左】

「ちょ、ちょっと！少しくつつき過ぎ！」

「いい匂いだし、落ち着くからこのままじゃダメかって？」

「うー—、もう変な事したら怒るからね！」

「なら、よろしい！」

「じゃあ、左耳も始めるから動かないでねー」

【耳かき音】

「はい、終わり」

「なにー、なんか物足りないの？」

「あ、じゃあ、いいことしてあ・げ・る」

【耳への息を吹きかけるのを2秒ほど】

【ここから無音ささやき。以降指示あるまで無音ささやきをお願いします】

「どう？こういうの」

「もっとやって欲しい？うん、いいよー」

【耳吹きかけを1分間】

「ふふふ、余程いいみたいだね？顔がとろけちゃてるよー」

「じゃあ、反対側の耳もやって上げるね？」

【方向：右に変更】

【耳吹きかけを1分間】

「はい、これで終わりー どうだった？」

「気持ちよかった？ 良かった気に入って貰えたようで」

「じゃあ、仕上げはすごくドキドキすることとしてあげるね？」

「何をするのかって？」

【↓ここは熱っぽく】

「あなたの事、好き」

「大好きなんだよ」

【↓甘えた感じで】

「どう？すごくドキドキするでしょ？」

「うん、希ね。あなたの事ずっと好きだったんだよ？」

「あなたの事、心の底から好きなの…」

【ここから、好き、好きだよ、大好きをいろんなバリエーションで1分間お願いします】

【声方向：右側から左側へ移動しながら好きを連呼して】

【1分間左側で好きのバリエーションを1分間連呼】

「ふふふ、どう？希の気持ち伝わったかな？」

「改めて、希と恋人同士になろ？」